

100歳女性のライフヒストリー

—— 九州海村の恋と生活 ——

落 合 恵 美 子

はじめに

史料に登場する人たちに会って話を聞いてみたい——歴史を研究する者なら誰でも思ったことがあるだろう。それを実行しようという実験的試みが本稿である。

歴史と言っても、戦後史であれば問題はない。戦前であっても可能な時期はある。しかしわたしが扱っている史料は徳川時代の宗門改帳であり、時期的には18、19世紀のものである。そのような時代を分析するために、聞き書きという方法から何かを得ることはできるだろうか。

出発点は九州の海に面した二つの村の宗門改帳だった。わたしはこの10年ほど日本各地の宗門改帳と人別改帳をデータベース化して、徳川時代に生きた人々のライフコースや家族経験を歴史人口学的に再構成するという仕事をしてきた。これまで分析してきた本州の諸地域の間にもさまざまな点で違いはあって、日本の直系家族システムは一つではない、という論文を書いたこともある (Ochiai, 1998, 2005)。しかし、九州の二つの村の分析に着手したとき、その特異性は今までの経験を超えたものだった。

この特異な結果は、どのような生のリアリティを意味していたのか。史料に表れるような人生を生きてきた人から直接の証言を得たい。史料が語ってくれない真実や、そのときどきの感情を含めて。そうした思いから、確かな成果が得られるかどうか自らも半信半疑なまま開始したのが、高齢者のライフヒストリー・インタビューであった。

歴史研究にインタビューという方法を用いるのは、前例のないことではない。フランス社会史の一翼をなす歴史民俗学は、20世紀初頭を生きた高齢者へのインタビューから、フランス革命当時の民衆生活史を解釈する手がかりを得ることに成功した。フランソワーズ・ルークスはルソーが批判したスワドリングという産着を子どもに着せていた高齢女性の証言から、子どもに対する無関心の表れのように言われていたこの習慣が、今日とは異なる子ども観にもとづく配慮に支えられていたことを明かにした (Loux 1978=1983)。社

会史が対象とする心性が「長期波動 (*longue durée*)」と呼ばれる長期の時間相でしか変化しないとすれば、このような方法にも十分な根拠がある。

ライフヒストリーという方法は徳川時代の歴史社会学的研究のためにどれほど有効だろうか。本稿ではこうした方法論的意識を持ちつつ、九州海村に生きた100歳の女性のライフヒストリーに向かってみたい。

1. 九州海村の歴史人口学

まず、そもそもの解くべき問題、出発点となった九州海村の特異性とはどのようなことだったのだろうか。

西九州の宗門改帳データベースは二つの村の記録から成っている。長崎から西南に突き出した野母岬の先端に位置する肥前国彼杵郡野母村（1766～1871年）と、天草下島の西端で東シナ海に面した肥後国天草郡高浜村（1770～1866年）の宗門改帳である。どちらも海に面した海村だが、野母村はほぼ純粋な漁村であるのに対し、高浜村は海上交易で栄えた町場、農業、漁業など異なる生業をもつ複数の集落（迫）からなる。二つの村のあいだには歴史人口学的に多くの共通点が見いだせるが、それらはこれまで研究されてきた本州の地域では見られなかった⁽¹⁾。

二つの村に共通して見られる特徴の第1は、大きな村落規模と著しい人口増加である。18世紀以降寒冷期の人口減に悩んだ東北地方、ほぼ横這いの中部地方と比べて、九州の2カ村は三大飢饉の影響も受けず右肩上がりに人口を増やす（1871年の野母村の総人口3577人。以下、本稿では研究の進んだ野母村についての数値を示す）。温暖な気候、土地に制約されにくい生業などの理由が考えられる。

特徴の第2は大きな世帯規模である。幕末維新期の平均世帯規模を比べると、この地域は同時期の東北地方にほぼ匹敵し（1871年の野母村では5.7人⁽²⁾）、他地域より明かに大きい。西南日本の世帯は小さく単純という通念にあてはまらない。世帯構造に注目すると、キョウダイやイトコの核家族が横に並んだ合同家族世帯が9パーセントも存在しており（1871年野母村）、直系家族世帯が優位する本州とは異なる世帯形成原理を持っていたことがうかがわれる（落合 2004b）⁽³⁾。

⁽¹⁾ 東北、中部、九州の3地域の歴史人口学的比較については、落合（2004b）を参照。

⁽²⁾ 宗門改帳の記載単位を同居と生活共同の単位である「世帯」と考えてよいかという一般的な問題があるが、詳細な分析は別稿に譲る。結論から言えば、野母村では幕末に記載単位の分裂と縮小が起きており、それ以降の記載単位は「世帯」に近いものになっているのではないかと推察できる（Ochiai and Ono, 2002）。

第3の特徴としては、高い出生率と頻繁な婚前・婚外出生、およびそれを取りまく結婚慣習を挙げたい。この地域の粗出生率（CBR 28.8）と合計特殊出生率（TMFR 6.5）は近世中後期日本の最高水準に属する。女性の平均産児数は4.3人である。人口増加は高出生率による自然増加であった。年齢別出生率は自然出生力のパターンを示しており、意図的出生抑制を行なわなかったことが分かる（津谷 2002：190-1）。

さらに注目すべきなのは、頻繁な婚前・婚外出生である。野母村の女性の平均初産年齢は23.6歳で、初婚年齢より低い。結婚する前に出産するのが一般的なパターンだったのである（津谷 2002：192）。野母村の平均初婚年齢は女性25.3歳、男性31.1歳で、当時の日本でもっとも高い部類に属するが（Ochiai and Ono, 2002、落合2004a：43）⁽⁴⁾、婚前に性交渉をもつのは当たり前だった。年齢別有配偶出生率を求めると10代後半が非常に高いが、これは若年結婚はほとんど婚前妊娠のケースばかりだったことを示している（津谷 2002：190）。また、生涯未婚であった女性も、その4分の1は子どもを（しかも多くは複数の子どもを）持っていた（津谷 2002：192）。

内婚率の高さも特徴的で、野母村では92パーセントが村内婚である（落合 2004b：74-5）。なお、活発な性交渉ということから結婚の不安定性が予想されるが、離婚に至る割合は初婚の11パーセントであり、東北地方の34パーセントに遠く及ばない（Kurosu, Tsuya and Hamano, 1999：table 4）⁽⁵⁾。この地域における結婚の届け出のゆるやかさが離婚を過少に見せているようだ。

第4の特徴は、世帯間の個人の移動、とりわけ子どもの移動が頻繁に記録されていることである（Ochiai and Ono, 2002）。生まれてから数年たった子どもが突如「倅」として登場する。このような子どもたちをどのように理解すべきだろうか。「養子」に取られたと考えれば簡単だが、「養子」という記載はない。また、これらの「倅」には未成年者も多く、相続のために成年男子を養子に取るという日本の他地域に一般的な養子の年齢パターンと異なる。むしろヨーロッパに一般的な「養育のための養子」に近い（Goody 1976, ch. 6）。

以上より、徳川時代の九州の海辺の村において、特徴的な性・出産・結婚の慣習が繰り広げられていた様子が浮かび上がってきた。また、世帯構造という面からも、人の移動と

⁽³⁾ 屋敷地内に別棟をつくる複世帯制（大間知 1938=1975）ではないかと考えたくなるが、たしかに高浜村では徳川時代の史料にも現在も隠居屋が見られるものの、狭い平地に家屋が軒を接して密集する野母村では一つ屋根の下に文字通り同居するパターンもかなりあったのではなかろうか。

⁽⁴⁾ 近世日本の結婚の特徴と地域差については落合（2004a）、Kurosu, Tsuya and Hamano（1999）参照。

⁽⁵⁾ そもそも近世日本の離婚率は全国的に前近代社会としては非常に高い水準にあり、東北地方は今の米国並みであった（落合 1997=2000：72、2004a）。

いう点についても、直系的でメンバーシップの確定した家とはひと味違う生活組織の人々は拠り所に使っていたようだ。

2. 先行研究による解釈

ここまで描かれた九州海村の歴史人口学的特徴について、何も驚くに値しないと思われる方もあるだろう。西南日本や漁村の特色としてこれまでの研究史の中で論じられてきたことと、これらの歴史人口学的発見のいくつかはよく符合する。その特色を数量的に計測してみせたこと、また徳川時代にも存在していたことを明かにしたことの意義はあるが、新たな説明を要する事実があるのかと、問う方もあるだろう。

例えば、漁村には村落規模の著しく大きい場合があることは知られている。農村と比較して村内婚比率が高いことも周知である。また頻繁な婚前出生は、宿やヨバイの習俗と結びつけて論じられてきた。村人の家や独立の家を宿として村の若者たち（あるいは娘たち）が泊まり、共同労働と教育、そして男女交際（いわゆるヨバイ）の機会としたという習俗である。処女を尊ぶ習慣はなく、婚前性交渉も婚前妊娠も当然のこととみなされていた。女性たちは結婚儀礼のあともしばらく、ときには数年間も親の家に留まり、ひとりかそれ以上の子供を産んでから夫の家に移るのが普通だった地域も多い。宗門改帳への登録も数年間遅れる傾向があり、『民事慣例類集』にも、肥後国天草郡の事例として、「送籍は年限の定めなく一子を生むの後双方送籍をなす慣習なり。」とある（司法省 1976）。

しかし、もう一步踏み込んでこの習俗の実態に迫ろうとすると、従来の研究から結ぶ像はひとつにはならないということに気づく⁽⁶⁾。

第1の類型は、結婚を前提とした配偶者選択の機会としてこの習俗をとらえる見方である。たとえば『若者と娘をめぐる民俗』を著した瀬川清子は、「婚姻制度としての寝宿」（瀬川 1972：250）と位置づける。相手が定まるまでに数人の恋人を持ちかえることはあったものの（瀬川 1972：288）、「若い者たちは既婚者の侵入を許さなかったが、村民もその節度を破るものはほとんどなかったようである。若い者たちの清純がよく守られたので、時として若さからくる混乱はあっても墮落はなかった。宿のなじみの結婚はあとが堅いという。」（瀬川 1972：284）と健全な配偶者選択の制度であったことを強調する。竹内利美も「そこでの生活は、それぞれ将来の配偶者を選んで、幸福な結婚を実現する準備過程となった」とし、宿親の監督や仲間の統制により（竹内 1991：7）、「けっしてみだ

⁽⁶⁾ 以下では森栗（1995）の整理を参考にした。

りがましいものではな」(竹内 1991:13) かったとする。江守五夫によれば、「同時複数はいけない、友人の馴染みの者との関係はいけない、ひんぱんに相手をかえてはいけない、他村の異性を相手にしてはいけない」などのルールがあったという(江守 1974)。

第2の類型は、自由に楽しむ「遊び」としての面を強調する赤松啓介らの立場である。「夜這いはムラによって差があり、どことも同じでないが、基本的には『遊び』というものだ。若衆と娘や後家、女中に限るムラもあれば、老若にかかわらず、また夫婦に関係なく開放というムラもある。夜這いから結婚することもあるが、夜這いは結婚を目的とする民俗ではない。」(赤松 1986:128-9)。女性とくに中年の女性からの誘いもよくあったという(赤松 1986:182-98)。宮本常一もこの立場に近く、「そのときには嫁や娘の区別はなかった。ただ男と女の区別があった」(宮本 1960 =2004:33) と言い、早乙女たちのあけすけな会話や、後家や人妻をかまう男達を描く(宮本 1960 =2004:127-9, 143-58)。

第3の類型は、健全な配偶者選択にはおさまらない現実があったとしながらも、赤松のようにおおらかな性を賛美するのではなく、村の若者集団による娘集団の支配という面を強調して、女性の選択権や恋愛の存在を否定する女性抑圧史観の立場である。

赤松は強姦について「強姦されたという女たちの話を聞いていると、襲った若衆たちの方がかわいがってもらったのだ」(赤松 1986:197) とまとめ、後家は若衆の「ケイコ台」だったと言う(赤松 1986:172)。また、「生まれた子供はいつの間にかムラのどこかで、生んだ娘の家やタネ主かどうかかわからぬ男のところで、育てられていた」(赤松 1994:32)、「嫁や嬬が産んだ子どもの卸元を調べようなどという料簡の狭い男はいない」(赤松 1986:198) と子供についても楽観的である。三砂ちづるが言うように、後家にとっても若衆との関係が必要という面もあったろう(三砂 2004:48)。しかし、それでも、性的自由を女性も享受するばかりだったという赤松の楽観には一抹の疑問を感じざるを得ない。その一方で、ヨバイに恋愛はなかった、女性の選択権は無かったとする見方も一面的ではないだろうか。

このように見てくると、従来の研究を参照しても、歴史人口学的が数量的に描き出した人々の行動の実態や意味は、必ずしも明かにはならない。第1の見方のように、ヨバイが結婚を前提としたものだったら、そして子どもが生まれてから送籍するという慣習であったなら、婚前出生の多くは後に夫となる男性の子どもを法的婚姻の前に産んだにすぎず、この地域の性慣習は見た目ほど乱脈でも特殊でもなかったということになる。しかし、第2や第3の見方のような実態であったとすると、婚前出生の、あるいは場合によっては婚姻中に出生した子どもの実の父親さえ確定しえないという、ずいぶん複雑な事態となる。

いったい実態はどちらに近かったのか。人々はどうのような感情を抱いて、どのような意

味づけをして、そのような生を生きていたのか。また、そのことと地域特有の人口動態や世帯や人の移動のあり方とはどのような関係にあったのか。できることなら史料に登場するような人々に直接にインタビューしてみたいという思いは、やはり消すことはできない。

従来の研究ではまた、歴史的変化に関してもいくつかの仮説が並列している。瀬川清子は、「こういう宿の生活は配偶者を求めるためのものであるという地方と、ナジミが必ずしも結婚の相手ではないという地方があるのは、婚姻と宿の生活の関係がなくなってゆく過程を示しているものではなかろうか。」(瀬川 1972:266)と、統制が次第に弛緩するという方向の変化を想定している。本来のかたちは乱脈ではないとする江守も含め、前述の第1の類型に属する論者は、変化についてはこの仮説を共有しているようだ。

他方、宮本常一は、観音堂の歌合戦の後の性行為や遠くの村への夜這い、出戻り女や後家への夜這いがなくなり、明治末から見ず知らずの遠くの女との見合い結婚になったと言う(宮本 1960=2004)。赤松啓介は、明治末期には村の上層農民は夜這いから阻害されており、中間下層は分化し、町に出て酌婦などの買春を利用する男性が出始めたとする。かつてはさかんだったヨバイ慣習が次第に衰弱して、見合い結婚と買春との組み合わせに取って代わられたという仮説であり、第2の類型はこの変動論に結びつく。

森栗茂一の『夜這いと近代買春』(1995)は、水俣と天草におけるヨバイの変容を、自ら行ったインタビュー調査や『聞書水俣の民衆史』(岡本・松崎編 1989-90)にもとづいて描き出したものである。「佐敷・水俣・女の夜這い」と言われ女子も男宿に泊まりに行く習慣があったのが、市場経済の浸透によりヨバイが崩壊して、女たちは売春婦になり男たちは買春へと向かうようになる過程の分析は非常に興味深い。その一方で「明治末から大正にかけて、錢稼ぎと錢による義理が増え」、ヤウチ(親類)のつき合いに苦しみ「ヤウチの拡大を好まない親たちが、ヤウチ内での親戚結婚をすすめるようになった」という。遠くの女との見合い結婚が増加したとする宮本とは食い違うようだが、親が主導権を握った結婚が増えるという点では同じだろう。

そして「村のなかでの女性の選択権を認める(男性による)管理支配」という従来のヨバイのシステムが崩壊するなか、「男の責任感が薄れていき、男の無秩序な暴力によって女の拒否権が侵害されて」「『馴染子』(私生児)と『いかず後家』が村にあふれることとなった」という(森栗 1995:59-61)。森栗の枠組みは歴史的変化についての上記二つの仮説を折衷したものと言えようか。

変動の仮説についてもいずれが妥当なのかという問いを胸に抱きながら、ライフヒストリーを追ってみよう。

3. 歴史研究の方法としてのライフヒストリー

本稿では、ある高齢女性へのインタビューを通じて、これらの疑問を解くための手掛かりを求めようと思う。その女性とは、畠中亀菊（カメギク）さん。2004年の訪問時点でちょうど戸籍年齢100歳で、総理大臣からいただいた表彰状を見せてくださった。亀菊さんは鹿児島県肝属郡根占町在住で、その隣町の佐多の出身である。第1回目のインタビューは2004年2月、第2回目のインタビューは同年11月に実施した。

史料は長崎と天草という西九州のものであるのに、南九州の大隅半島での経験をその解釈に用いることができるのかという疑問はありうる。実は今回、根占での調査を開始する前に、史料の得られた旧高浜村と野母村でも高齢者のインタビューを実施している。高浜村では90代の女性お二人に長時間のインタビューを繰り返し、興味深い成果があがっているが、本稿のテーマに関しては「結婚は親が決めた」という以上の証言は得られていない。野母村ではコヤド（男性数人で家の2階を借りて寝泊まりする）について男性たちからの証言が得られたが、まだそれほど踏み込むまでに至っておらず、女性からの証言もない⁽⁷⁾。

そこで本稿では、地域は違うが女性からの証言であり、しかも圧倒的に豊かな内容をもつ亀菊さんのインタビューを活用することにした。天草や長崎と大隅を比べると、薩摩藩は独特の郷土制度や門割制度を敷いたという制度的な違いがあり、市場経済の浸透や近代売春の発達程度など他の条件も異なる。しかし九州の海村という点は共通しており、内藤莞爾の『末子相続の研究』（1973）でも天草、肥前、鹿児島、五島が並べられている。第一次近似として参照することは許されるのではないだろうか。

インタビューを歴史研究の方法として用いるには、方法論的な問題がいくつかある。

第1に歴史性の問題がある。慣習は時代とともに再構成されてきたのだから、変わらぬ伝統があるわけではない。インタビューは話し手の生きた特定の時代の特定の経験を聞くものでしかない。心性史や社会史は事件史とは異なり長期的に持続する時間層を扱うとはいえ、明かにしたい歴史的時代との間に起きた社会的変化に充分留意して、有意な断絶があると認められる場合にはこの試みは断念しなければならない。

歴史人口学の成果によれば、東北日本では19世紀の初めに社会構造やライフコースの大きな変容があったことが分かっている（平井 2003）。この地域では、明治以降に生まれた女性のライフヒストリーを聞き取ったところで、18世紀の史料の解釈にはほとんど役に

⁽⁷⁾ 大隅で得られたような証言が天草、長崎で得られない理由については、実態の違いを反映しているのか調査上の問題なのか、実態が違うなら地域差なのか変化の時期の違いなのか、今後の検討を要する。

立たないだろう。しかし九州の海村に関しては、歴史人口学的にはこれほど劇的な変化は発見されていない。

第2に構築性の問題とでも呼ぶべき問題がある。歴史に適用した場合のみでなく、インタビューという方法一般にあてはまる問題だが、インタビューは客観的事実を聞くのではない、話し手と聞き手の相互作用の中で共同でリアリティを紡ぎ出すことだという自覚が不可欠である。これはエスノメソドロジーと構築主義の洗礼を受けた後のインタビュー方法論の常識と言えよう（桜井 2002、落合 2004c）。話し手の側の条件とともに、聞き手の立場、性別、年齢、インタビューの状況などによって、語られる内容や意味づけが変化することに敏感でならねばならない。

第2の構築性の問題に関しては、亀菊さんへのインタビューは、亀菊さんと家族同様のつき合いをしてきたという隣家の岩倉キチ子さん・次男さんのお宅で、お二人の「通訳」と合いの手を交えながら始まったということの特筆しておいたほうがいだろう。岩倉さんは折に触れて亀菊さんの思い出話を聞いていらしたので、的確な質問をはさんでくださり、亀菊さんもリラックスして、微妙な事柄もスムーズにお尋ねすることができた。聞き手のわたしは「先生」と呼ばれていたが、女性どうしということもあり、特に2回目のインタビューではうち解けて、岩倉さんの立ち会いがなくても1対1でお話をうかがうことができた。

構築性に関連するが、このインタビューの一つの意義は、女性が女性に尋ねるという点にあると考える。ヨバイや男女関係についての聞き書きは、瀬川清子などを除いて、多くは男性が男性に尋ねたものである。性の自由が女性に回したツケについてあまり言及がないのはそのためではないか。男性が女性に尋ねた場合も、女性は面白おかしい面を強調したかもしれない。このインタビューではこの習俗が女性に対してもった両面性をうかがうことができたように思う。

以下では亀菊さんのインタビューを、ライフヒストリーの流れが見られるように整理して紹介する。今日のライフヒストリー研究では、構築過程を重視するためインタビューの対面状況の再現に留意する傾向が強いが、本稿ではライフヒストリーの流れを優先したのである。ただし答えを引き出した問いを知る必要がある場面では、問いの言葉も書き残した。

ライフヒストリーの流れを重視したのは、性や男女関係にまつわる事柄を突出させるのではなく、女性の人生全体のなかにあることとして呈示したかったからである。亀菊さんはライフヒストリーに示されるように頭脳明晰で、仕事にも家事にも能力を発揮し、村の女性たちに一目おかれて婦人会の要職も務めた方である。岩倉キチ子さんの言を借りれば

「村の女大学の先生」ということになる。亀菊さんのそうした面がじゅうぶん伝わるだけの紙数がなくて残念だが、そういう方のライフヒストリーとして読んでいただきたい。

4. 畠中亀菊さんのライフヒストリー

K：畠中亀菊さん A：岩倉次男さん B：岩倉キチ子さん O：落合恵美子

< >内は標準語訳 *は分析や追加情報など

生まれ

K 生まれは明治36年の、11月に生まれたと。

K お父さんの37、8年に、日露戦争に行っておいやらんじ。ほって、明治36年11月に生まれおっとをな、お父さんが兵隊さんでおいやらんじ、生まれ日からごかげっおくれ、4がっみっかにつけっくれって、おいやっと。<お父さんは37、8年に日露戦争に行ったのです。それで、明治36年に生まれたのを、お父さんが兵隊さんとして行ってしまうので、生まれた日から5か月遅れて、4月3日に届けを出してくれているのです。>

K 生まれたとこね。佐多の、いざしき、あげんそん村、あげんそん部落。<佐多の伊座敷上園村>

*1903年の生まれだが、届けが後れたので、戸籍上は1904年生まれとなっている。インタビュー時点での実年齢は101歳。結婚も実態より後れて届ける慣習だったが、出生も同様だった。宗門改帳の時代にも同じことが起きていた可能性がある。

きょうだい

K あたいが生まれたとっがな・・・いっとかっとし・・・10人じゃったどんなあ。男ばっかい。はしかけやっとし、け死んだ。はしかがはやってなあ、はしかでけ死んだ。いっとごっとし、10人やったと。やけど男は、ずるっ亡くなって、女ばっかい、5人。やっただん、もう女も2番と5番が亡くなって、もうおらんと。<私が生まれた時は・・・一時は・・・10人だったのですが。男ばかり、はしかを患って、死んでしまいました。はしかが流行って、はしかで死んでしまいました。一時は10人だったのです。だけど男はぜんぶ亡くなって、女ばかり、5人。だけど、もう女も、2番目と5番目が

亡くなって、もういないのです。＞

K いま佐多にふたりおっと。妹が。

K あんまい長生きしいちよつとが、こらもう、くやんじょっち。＜あんまり長生きしているので、悔やんでいるんですよ。＞

*当時の乳幼児死亡率の高さがうかがえる。

子どもの頃

O 子供の頃のことで、憶えていること、何でも、教えてください。

K もう、小さい時かい、まっこち、難儀したい。子どもの守したい・・・うちが農家で忙しいとこどしたろが、もう小さい時かい、子ん守したい。＜もう小さい時から、本当に、大変な思いをしましたよ。子供の守をしたり・・・うちが農家で忙しかったから、もう小さい時から、子守をしていました＞

K ほいで、あたいどんが、もうしごっすいごっなってからん、山にいったつもん、薪木を取ってきてなあ、また山から取ってきたとどん、こげんちんと巻いて持って行きたい。＜そして、私たちが、仕事をするようになってからは、山に入って焚きもの、薪木を取ってきてですね、そうやって山から取ってきたのを、小さく巻いて、持って行くんですよ。＞

K ちいせなときから、ほ一んに、てげなしごっど、したと。わしどんな。＜小さいときから、かなりきつい仕事をしたのです。私たちは。＞

K わがえでは、もう、んつとにねえ・・・学校かい帰ってさあ、もう、学校どんもよお、あたいどんがちっせころはもう、ふろしっのおかし、おかしふろしに本を包んでい、学校かい帰ったとかあ、あがいたちやってよお、のちごちおいさん達のおいごくれえば、唐芋ふたつふとくれ入れ、仕事行くじおいやっどなあ、子どもでもごいやったと、やっぱい。＜我が家では、もう、ほんとにねえ・・・学校から帰ってね、もう、学校でもね、私たちが小さい頃はもう、風呂敷の古い、古い風呂敷に本を包んで、学校から帰ったときはそれを、あがいとぐ（玄関の上がり口）に置いておいて、その後お父さんたちのところへ行くので、サツマイモを二つ懷に入れて、仕事に行っていたものです。子供でも（仕事に）行っていたんですよ。＞

K 朝くれおっかい・・・＜朝暗いうちから。＞

K 牛やひっけておっかい・・・＜牛を引っ張って行ってなあ。＞

K うん。もう、牛がにひっおった。ほって、牛ひっぱって、草を切って、牛っ世話どんせよってやっで。ほって、にはんいって、わがっちゃいっばいかる、先行ってやってかいひって行って、草切って、また草を切らんとつにや、いっぴつがたんぼいってきにや、いっぴつにや草をとってうせっ・・・＜牛が2匹いました。そして、その2匹の牛を引き連れて、草を切ったり、牛の世話などをしていました。そして、近くにいる人間（身内）のなかで一番身軽な私が、先に行って草を切ったりとか、草を切らない時は、1匹は田んぼで働かせ、もう1匹には草を背負わせて・・・＞

K やうっのおばさんどんが行かっとかあ、おばさんたっが手でっくいやっど、弁当どん持たせい、ひんのいっぺかかってい、おばさんたっが晩頃もどっとかせっもろっ、うせもろったいしよったと。＜身内のおばさん達が来てくれた時は、おばさん達が手伝いにきてくれていたんだけど、弁当を持たせて、昼いっばいかかって、おばさん達は夜に戻ってくるまで手伝ってくれていました。手伝ってもらっていたんですよ。＞

*子どもの頃のことを一般的に尋ねたら、子どもなりに任せられていた仕事の話ばかりで、遊びの話が一切出ない。天草高浜村の農家に育った同年輩の女性のインタビューでも全く同じであった。これに対し、高浜村の豊かな医者の子の出身の同年輩の女性は遊びの話をしてくれた。

学校

K お父さんがおらじ、戦争始まったらおいやらっじ、学校もほいで始まっても、11月のやっがみてかっじ、学校もここので出たと。しがってかたすれば。ほら、あ、それ、やっとかでっがっや、お父さんがかんたって届けがおくい、学校もここのっかいでくいやった。いっついはい、2年にあがるとかあ、とおで。＜お父さんがいなかった、戦争が始まって行ってしまったから、学校が始まっても、私は本当は11月生まれだけど、学校も9歳から行きました。（私の誕生日は）4月というこになってしまっていたので。本当のところは8歳から行くところを、お父さんのことで届けが遅れて、学校も9歳から行くことになりました。2年に進級したときは、10歳で。＞

K ここのっからあがったが、やっば歳のほどやったい。いっねんから2年にあがるときは優等で、2年から3年にあがるときは2等、優等。そいでそれからは1等、1等ばっかいで。＜9歳から学校にはいったせいか、やはり歳とっていたほどのことはありました。1年から2年に進級するときはずぐれた成績で、2年から3年に進級するときには2

番。これもすぐれていた。そしてそれから、1番、いつも1番だった。>

K ほって、校長先生どんのおいやったがなあ、知恵なくやっでなあ。先生なわがんおいやっでなあ、学費なくなるって、体んぶんな学校やっくい、やったがなあ、2晩な、相談においきやったな。おとっやいもっがおっでい、せやならんって、ださならんってやっでや。＜それで、校長先生がいたんだけど、提案をしてくれてね。先生が家に来てね、学費を出してあげるから、能力に見合った学校にいかせてやってくれ、と言ってね、2晩も、相談に来たんですよ。でも、弟や妹がいるし、無理です、出せませんって、（親は）言ったのよ。>

ヨバナシ（ヨバイ）

K んにゃあ、そげなんは、おなごんしは行かんげや。男んしが行く。そって、若いときな、友達の家泊まったりしよったろが、そのときに、男んしが行って、ねんごろしていっと。＜いいえ、そういうのは、女の人からは行かないです。男が行く。そして、若いときには、友達の家泊まったりするでしょう、そのときに、男の人が行って、仲良くして帰るんですよ。>

K ああ、女が、あっちに泊まったり、こっちに泊まったりしてな。

K 男は泊まらん。おなごんしが、友達泊まったりしよったと。そこに、男んしが来よったわけ。おなごんしがおれば、夜遊びをすること。

K （男は）好いたおなご泊まっちゃれば、ほら、ひとりで来る。

K （女たちが）2人3人寝ちよっとをな、好いたのをな、外から引っ張っとよ。

K それは、間違いはないよ。女のほうも、もう解ちよっとやっで。

K 親は知らん。友達と泊まるとるじや、親は別んどこで寝とるしや。親んしは奥の間で寝てな、若いしはやっぱな、広い間で、みんなで寝る。親んしと、友達んしは、別々で寝るしや。だかい、親んしは知らん。＜親は知らない。友達と泊まる部屋と、親が寝る部屋は、別だからね。親は奥のほうの部屋で寝るし、若い人たちはひとつの座敷にみんな寝るから。>

K 食事は我が家でして、友達の家泊まりに行くだけ。

K （男が入るのは）玄関からじゃねえ。外から入られるところがあるが、そこから入ってくると。どことは決まってね、どこから入ってくるかは解らん。

* 同じ根占の79歳の女性は、家で3人姉妹が寝ていると、男が入ってきて、姉妹のひとり

の布団にもぐりこんだという体験を語ってくれた。

K ああ、子供が出来るしもおる。そって結婚するしもおっが、親が嫌がれば、誰が子や
って言って、男んしにくだりたりもする。やっぱ、男に取られるじや。

K 男ん家には、その男のお母さんがおるで。おばあさんになるとよ、そんしが、育てる
とや。男におかた<嫁さん>がおれば、そら、そんしが育てるやっが。男におかたがお
らんしは、おばあさんが育てるしや。

K そげなし（おかたがいる男）もおるな。

K （それは）悪いことよ！おかたんしがおって、しれれば、もう会うてん口もきかん。

K おかたがおっても、好いたしがおれば会って、そんしが良くなれば、最初んおかたん
しをうっせく捨てて>、そんおなごんしと一緒にするわけ。そげなことも、よくあった。

O 子供が産まれないようにする方法はなかったんですか？

K 1カ月に3人男が変わればな、子供は出来んで言われよったと。かわりがわりな。

*大変な避妊法だが、それがまことしやかに言われるほど男性関係の豊富な女性もいたこ
とがうかがえる。避妊法については、水俣では「妊娠しやせんじやろうかて心配して、あ
っち寝返り、こっち寝返りする。それで男のものがめったに溜まるものじゃなか。一年も
二年もつきおうた女子が何人も居るが、妊娠したというのは一人も居らんじゃったな」
（森栗 1995：59）という例がある。

K（もてる女性は）そりやもう、手も八丁口も八丁って人やろたい。

*「それはばっばんのことですね」と受けると、おおいに笑った。

親が断った結婚話

K 先生どんになあ、言われんけつどなあ、やっぱあたしんしとちごっような、やうんの
しになあ、何人っていやっけどなあ、やっぱつとめをしよって、あつたんけどが、やっ
ぱぶらっからださならんって、よそっぶらっから、くれたならん子やってなあ、あげん
げのせんせげなあ、もう、なんな言いよったげな、もろっくるいやっしごなって、いい
やっただげなあ、もう、ぶらっからださならん、ぶらっからだす子やねえってなあ。ま

こち、ふっげなこっやったい、きげなこっでなあ、まこち、あたしなきげっていいって、言っただげどんなあ、もう何人って、そげなしがおいやったなあ。そげんやっただど。＜先生と名のつく人に言い寄られたこともあったみたいだけどやっぱり、私ではなく、親などの身内の人に、何人か言っていたみたいです。働いていて、そういうことがありました。やはり（親は）部落から出さないって、よその部落に渡すことのできない子ですって、私に言うまえに先回りして、（言い寄ってくる人に）そう言って断っていたみたいです。先生とかがね、もう、何か言ってきてたみたいです。嫁にほしい人だと、言ってくれてたみたいです。でも（親は）部落から出さないって、部落に渡すことのできない子だって言っただみたいでねえ。出ることができなくてね。私は良かったんだけどね。もう何人って、そういう人がいたみたいだねえ。そんな感じだったよ。＞

K あたしどんがじけっきいとやっが、せんせくるっが、そんが良かったやっが。＜私が直接に聞いていたら、そんな良い先生だったのなら、行っていたのになって、その方が良かったのに＞

K あげんぶらっにおって難儀をすっよかなあ・・・＜あんな部落にいて大変な思いをするよりもねえ・・・＞

K こげなちかといより、ちった良かたっだねえな。＜こんな近いところに（嫁に）行くより、少しは良かったんじゃないかなあ。＞

最初の結婚

K 結婚式な、行っただこの、男んげえでしたと。＜結婚式は、嫁に行っただこの、男の家でしていたよ。＞

K ふっとかとの、すつとよ。日にちが決まっちゃつどが、行くところ、青年のしが、待っちゃつてな、水ひっかけつとや。ほつでな、わがえんげえな、海岸のそばやっただんよ、かいぐるっじ、畑んどん通つて、裏道どん通つて、海岸どん通つて、裏まわりをして行っただと。ほつて家に入るやろうが、しておると、青年のしが来て、水をかけるごたつたがつて言うつとよ。ほつて、そら、青年のしがおるとこな通らんじやつて、来て座つとやっが。＜盛大にやるのよ。日にちが決まってるでしょ、通る場所に、青年達が待ちかまえていて、水をひかけるのです。だから、私の家は海岸のそばだったから、逃れるために、畑を通して、裏道を通して、海岸を通して、裏まわりをして行っただのです。そして家に入っていると、待っていたら、青年達が来て、「水をかけるつもりだったのに！」って言うつたのですよ。それで、そら、青年達がいるところは通らないで来て、座っているわけでしょ。＞

*若者たちによる婚礼の行列の妨害は、若者組の強い地域でしばしば報告されている。

K わがまいで行ったとやなか・・・だが仲人やしいじゃっけ・・・？＜自分の意志で行ったんじゃないよ・・・誰が仲人になったのかな・・・？＞

K うん。そんとながな、おばさんとこやったと。

K んにゃあ、大始良やねえ、わが部落や。

*亀菊さんの祖母の妹の孫と結婚した。つまり親どうしがイトコ。根占の79歳の女性によると、財産を他へやりたくないからイトコ婚が多かったという。この地域ではイトコ概念は広く、親類一般をさすこともある。森栗茂一は『聞書水俣の民衆史』（岡本・松崎編 1989-90）の分析からヤウチの結婚が近代になって強められたとしているので、根占でもいつからの慣習であるかは検討を要する。

K ほって、姉がおったと。上の姉がおって、2度目どんあたしがたん子よかん、姉が連れ子をしよったと。ほってその子にあとを継がせろじ、2度目どんあたいと子をばん、出させよったと。＜それで（その家には）、姉がいました。上に姉がいて、2度目となる私の子供よりも、姉が連れ子をしていて、その子にあとを継がせるために、2度目の私と子供は、追い出されたのです。＞

K 最初んときの子ども、5ヶ月で、子どもの病気で、け死んだわけ。

K （出されたのは）もう、その子がけ死んで、間もなくやったかもなあ。

*子どもの死亡時期について発言が食い違う。子どもが死んでまもなく離婚したというのが事実らしい。

K 姉の子にあとをくるっじ、親んしないと田をなもっちゃったじ、わいどんな唐芋や、飲むもんも、ろくにあたえんとやったじな。＜姉の子供にあとを継がせたいばかりに、親は田を少しは持っていたからね、私には唐芋さえろくにくれなくて、飲むものでさえも、ろくに与えなかったからねえ。＞

K ひもじっさわすれがならん。畑なさすときも、芋も飲むもんも、ろっじ与えやせん、わすれがならん。＜ひもじさをよく憶えています。畑仕事に出すときも、芋や飲み物さえも、ろくにくれなかった、憶えているよ。＞

K まっこち、そんなかあ、わすれんならん・・・＜本当に、その時のことは、忘れることができない・・・＞

K そんなあとも、そいつに5人嫁がきたが、財産なしめっじ、みな追い出したとや。＜そのあとも、その男には5人の嫁が来たのだけど、財産をひとり占めするために、みんな追い出したらしいよ。＞

*亀菊さんを追い出した後で取った嫁もヤウチからだった。しかし、財産を独り占めするために、ヤウチからの嫁でさえ追い出したという事例である。

*出戻った娘の子による相続を選好した点も注目に値する。

婚外子を生む

K ……いんやあ、フミオはあとからの子やっで。＜いいえ、フミオはあとから出来た子です。＞

K フミオンげんとな、結婚な、せんやった。

K フミオの親なあ・・・鹿屋で、大工どんしよったと。だまかされ、そら、行った。＜フミオの親は・・・鹿屋で、大工さんをしていたよ。騙されて、ほら、行ったのよ。＞

K 鹿屋んしは、(佐多に)大工にきとってな。学校を作りきとってな。あたいをもらうごとあってん・・・

K (自分は)小使いをしよったと。あいやってくれ、こいやってくれと言われたら、それをしよったと。頼まれてな。学校作りには、朝鮮人のしも来よってな、一度はそんしがわいに言い寄って、日傘をかうてきた。日傘をやっで、抱くごとあつと。わいは「いらん」って言っで、はねのけたと。もう、あっちこっちかい、学校の先生どん来たい、朝鮮人の来たい・・・

K 若い頃はな・・・着るもんもいろいろやっで、頭も、いろいろまげよったで。髪の毛が多かったじ、ハイカラなまげやっでみたい・・・

*若い頃、亀菊さんはお洒落で、顔もかわいく、男性に人気があった。岩倉さんによると、「さばけていた」(頭の回転がよかった)ことも人気の理由だったろうという。

*ここでの事例は、女性からの拒否もあったことを示している。ただしけっこう力づくで拒否する必要があった。

K そんなには、おかたが、おっとやっじ。おかたがおって、知っちったどんな。男んしが、ただの三日でも、おまえと暮らすごたって、だましおってな。＜その人には、妻がいたんですよ。妻がいるって、知っていたんですけどね。その男は、三日だけでもあなたと暮らしたいって、うまいこと言ってだましてね。＞

K お前と、日の三日でん、暮らすごたって。わがしよてとして、日の三日でもて。＜お前と、三日でも良いから、暮らしてみたいって。自分の所帯として、三日で良いからって。＞

K あたしより、12歳上よ。

K （親んしには）黙って行った。ほってそら、おかあさんの妹んげが、垂水にったじ、そのおばさんに畑んとこで会って、行くところじ言ったら、そのおばさんから知れて連れもどされたことや。＜それで、おかあさんの妹の家が、垂水にあったでしょ、あのおばさんに行きがけに畑で会ったから、行き先を言ったら、そのおばさんから皆に知れて連れ戻されたわけですよ。＞

*妻のいる男性と知りつつ関係を結ぶ。「日の三日でん」というロマンティックな口説き文句にほだされて親に黙って家を出たというあたり、恋愛は無かったという説への反証と言えないだろうか。後からそれを「だまされた」と表現してはいるものの。

*相手は仕事を渡り歩く大工だったという。「わしらみたいに女をかまうもんは大方百姓をしておらん人間じゃ。」という宮本常一の土佐源氏のせりふを裏付ける事例（宮本1960=2004：144）。後出の亀菊さんの2番目の夫も土方（黒鯨）だった。

K 私には、そげな（一緒に暮らすような）気はなかった。向こうにおかたがおることな、知とったじな。

O でも、子供ができたんですよ。それを知ったとき、向こうのおかたは怒りました？

K どうやっかね、知とったか。知らんとやなか。

O 子供をおかたにやろうとは思わなかったですか？

K んにゃ。自分で育てかた。

K 五つぐらいのときなあ、五つぐれんときまで一緒に暮らしよったがなあ。ほって、あたしは根占せえ行ったやっじ。ほって、あたしんせえお母さん、おばあちゃんになるがな、そいが育ててくいやったわけ。子どもがなあ、我が家ん下に川があっじや、その川んところで、あたしお母さんがところに行きたいよって。ほって遠いやうち〈親戚〉んしが、まっこち可哀想やって、言いよったんですよ。子どもが海老どんつかまえながら、

お母さんのところに行くごとあるって、独り言をいいよったじ。

O 根占に連れて行こうとは思いませんでしたか？

K 連れて行ったっち・・・喰うもんもねえ、家も腐れ家、雨漏りもするし、電気もね。
我が実家は、屋根もあっじ、喰うもんもあっが。

*亀菊さんの実家では弟たちが皆はしかで亡くなったため、娘の生んだ婚外子を跡取りにした。

O フミオさんは、その大工をしていたお父さんには、会ったことがあるんですか？

K 知らんど。おっかたどんがおったじや、おっかたどんは知らんど。

O お父さんのほうも、知らなかったんですか？

K 知っとったぞ。

B フミオさんが産まれたと知ったときは、何もなかったとな？

K 何もねえ。

O フミオさんは、お父さんに会いたって言いませんでしたか？

K んにゃ。

B フミオな、自分の父親が誰とか、どうやって産まれたとか、知っとったとな？

K んにゃあ、何も知らね。

O そのころは、そうやって産まれて育つひが多かったのですか？

K うん。あっちこっちおったと、そういうしは。

*根占の79歳の女性によると、「あの人とあの人は本当はきょうだい」という噂は多かった。

お産

K 今んごと、産婆さんにゃおらせん。あそこんげえ婆さんな呼んでこいて言って、わがえで。<いいえ、今のように、産婆さんなんていないよ。あそこの婆さん呼んできてと言って、自分の家で産んでいたよ。>

K あっこんげ人が、よか風にすいとやって、頼んこいって言って・・・今んごと、産婆さんとな呼ばん。<あそこの家の人が、上手だから、頼んでこいって言って・・・。今のように、産婆さんとは呼ばないよ。>

K（産婆役へのお礼は）みもんでしよったとやっが。＜穀物でしていたよ。＞

K（お産は）わがえん、実家でしたと。

K（部屋は）コタよ。おなごんしが、着替えどんすつとこたい。

土方仕事と男たちとの出会い

K もうあん、どかっげ、ふつとかるっぴやっげ、せめんだる、男んしんど・・・＜もう、土方仕事でも、本当に重たい、セメントなど使う仕事も、男の人のように・・・＞

K かたげっ、かたげっ。＜かついで＞

K もう、男んしっどん、さっさっさって、こんくっ切ったい、なあ。＜もう、男の人のように、さっさっさって、コンクリートを切ったり、ね。＞

K 監督にきとらしちょんなあ、あたしどんがきちょつとこい、監督にきちょらいなあ、どこやったげな、やどんしてん・・・＜監督に来ていた人がいたでしよ、私たちがいた所に、監督に来ていた人、そのときどこでだったか、泊まっていた・・・＞

K ほっておるわいな、ほんのもってこっち来いばってな、取っていでっちゅうでな。＜そうやっているときに、（監督が）本を持ってこっちに来说いってね、取ってこいっていうからね。＞

K ほってきちょらっしか、あたしどんな下のほうにおるとんど、監督できちょらしたあ、上んほうの畑におってなあ、てまねくん、目をくるっじや。＜そうやって来ているのに、私たちは下のほうで働いているのに、監督で来ている人は上のほうの畑にいて、手招きをしながら見ているの。＞

K あたい山てんひっくむっがそら。わたっなんかおまえどみめっくるっがじ、目もやらんじ。＜私を山のほうに引っ張り込んで（悪さをしようとしていたんでしよ）。だから私はおまえらなんか興味ないと、ちらりとも見ずに、相手にしなかった。＞

K まこち、なあ。＜まったく・・・ねえ。＞

*佐多に延びる国道の敷設工事のときのこと。県から派遣されてきている現場監督が、今ならセクシュアル・ハラスメントにあたる行為をした。亀菊さんはここでも拒絶した。理由を尋ねると、身分が違いすぎるから、と答えた。

*恋のためにもレイプのためにも山に引き込むのが常套手段だった。山仕事のついでに、という事例も出てくる。

A ほいで何で、畠中のじいさんと、縁があったと？じいちゃんと。

K 一緒とどこで仕事しよったじや、そんで、見込まれて。

K ほいでほら、みつくろっじ、であうためにはでなあ、もいってんがったい、あたいを
もろごたっじゃでい、まっこち……<それでほら、目をつけたんでしょ、一緒に
なるためには、もうどうしても、わたしをモノにしようと、まったく……>

K 嫌やったどんよ、男がもう、聞かんわけ。もろごつとあつてよお。

K ほって、わがいがなにもんもせがならんて、言いがせんでおつてな。<それで、自分
の家には何もないとかは、言わないでいてね。>

K 直吉には、あったらしいしや<もったいない人だ>って、言われよったど。あたいな。

K (直吉との出会い) ああ…… あげな……なんじゃもとんちさんとなあ。<あんな
な……何が良かったんだらうねえ。>

K どこが良かったな……

K ほてもそら、してもせんやったとやが、どうしてあたいごなあ……<それにしても、
(結婚) しなくても良かっただらうに、どうして私と……>

A ほって、どっちから、嫁さんにくいやいって、言ったとな。じあんが言うたと？ばっ
ばんが、もろっくいあんって言うたと？<それで、どっちから、嫁さんにくれって言っ
たの。おじいさんが言ったの？おばあちゃんが、もらってくださいって言ったの？>

K そげっ言いやんな、まっこち……<そんなこと言うわけないじゃない。まったく
く……>

* 2 回目の結婚相手直吉さんとも土方仕事で出会った。直吉さんも現場監督をしていた。
籍を入れたのは同居を始めた時点ではなく数年後。直吉さんは今から30年ほど前に69歳で
亡くなった。

畠中の家

K われわれ、よそかたん、いいもんしやったでい、お父さんがかごんま伊集院、お母さ
んな、かごんまって言うどん……<(おじいさんのお父さんとお母さんは) 外からき
た人だったんですよ。お父さんは鹿児島島の伊集院、お母さんも、鹿児島だけど……>

K そってお父さんな、ごちゅうの、おすう引っ張ってごちゅうん、根占に、山から木を
引いてはらん、ありきしよいやったじ。<そしてお父さんは、おおきな雄牛を引っ張っ
て、根占で、山から木を引っ張ってくる仕事をしていました。>

K ほっでもう、ここんきたしな、あんどん火で、あんどん火で、電気ものう、ゆるいの火で火を焚くかたん、この瓦のつめんひんやって、ほてむかんな「あかし」っていいよったげな、あれで・・・＜それでもう、この人の家にきてみたら、あんどんで、電気もなく、囲炉裏の火で火を焚くところで、瓦のうえでこのように詰め物をつくって、昔は「あかし」って言うってたかな、あれで・・・＞

K 油をが、いっこが5銭なする油をなこっがならっじ、あかしの火で。来たとっか、なんじゃ喰うもんもねって、ようやと唐芋をこうてきたあ、とうばっか。ほってあたいがかってしごんな貰いにいったとかい、米なんなまろうてきて。いっももらってきたどってや。そげな暮らしをしよったと。＜油を、1合が5銭の油さえ買うことができなくて、あかしの火で。私が嫁に来たときは、何も食べるものがなくて、ようやく買ってきたサツマイモが、10個だけとか。それで、私が外に仕事を貰いにいった時とかは、米などももらってきた。よくもらえたからね。そんな暮らしだったよ。＞

K あいげよそんしない、田もねで、家なんども、ふんなか、かやん家ん、台風がすれば屋根うっとかして、人かいわらんなんぞもろてきて、わらをもろたい、むっがらをもろたいして。そげな家やんなもんなあ、雨がふっとかあ、雨がもったいして、着物の布でふせをしたい、オケをもったいしよったやが。も、ねっともねっ。雨がふれば、台風なすれば。＜あんなよそから来た人だと、田も持っていないくて、家も、どうしようもないような、かやぶきの家で、台風が来れば屋根の（一部が）なくなってしまったりして、人からわらなどをもらって、わらや麦がらをもらったりして。そんな家だったから、雨が降ったときには、雨がもったりして、着物の布でふせをしたり、オケを持ってきたりしていたんですよ。もう、寝るところもないんです。雨が降ったり、台風がきたりすると。＞

K （実家は）もう、何でん（ある）。も、行ったとっがな、米どんさんじょごついもろたい、1俵どんもろたこともあった、佐多どんな良かったい。＜もう何でも。もう、帰ってきたときは、米をたくさんもらって、1俵もらったこともあったよ、佐多のほうは良かったよ。＞

*夫の両親は村外から入ってきたヨソモノなので、土地が無く、貧乏だった。それに比べて実家はよかった。

K 家は、えっと・・・（舅姑と自分達夫婦のほか）ハルと、ツルと。ツルは紡績んど行っとなったでなあ・・・

K ほっでツルは、目をつぶっしなあ、目がつぶれっ、干上がって、腐れっじなあ。＜それでツルは、目を悪くして、目が悪くて、干上がって、腐れていたよ。＞

＊同居世帯員は6人。ハルとツルは小姑。舅は二次郎。

姑の連れ子

K お母さんなといでなあ、そっでその、となっのとおっかたおんしてん、腹ふとんなあってん・・・＜お母さんは、それでその、（結婚前に）隣の人と仲良くなってやることやって、腹が大きくなってしまい・・・＞

K かごつまおっがならんじ、ほってやまもっち、ばあさんのおいやっじ。そのばあさんど頼って、きやったと。

K ほっでそら、ばあさんとこん頼って産んだやろが、よそのっとはぜって出来た子をば。ほってそん子を産んで、山からもどくればそん子が泣くやろが、そん泣きよっ子を、「こん腐れがが！」って言って蹴りよったと。＜それでほら、（姑が）人を頼ってきてそこで産んだでしょ、よその人との間にできた子供を。そうしてその子を産んだのだけど、山から帰ってくれば、その子は泣いているのよね。そうしたらその泣いている子を「この腐れガキが！」って、蹴っていたのよ。＞

K そ、二次郎じいが。ほって、親んしも、やうんのしも見にくいやっどかい、また吉野に連れもどっど、って。連れもどっていったかい、ほら、鹿児島せい。＜そう、二次郎じいさんが。それで、親か、親戚の人がそれを聞いたのでしょうか、（その子供を）吉野に連れて帰るって言ったの。連れて帰ったんです、鹿児島のほうに。＞

K はい、はい。連れ子やっが。鹿児島でふとなって、やうのしも、いったいきたい、しよったがな。＜鹿児島で成長して、親戚の人も、行ったり来たりしていたよ。＞

＊1世代前の男女関係。夫の母親は、未婚で子を孕んだため鹿児島にいらなくなり、根占の親類を頼ってきて、そこで山仕事をしている二次郎と結婚した。しかし二次郎が連れ子を虐待するので、子どもは鹿児島の親元が親戚が育てることとなった。「生まれた子供はいつの間にかムラのどこかで・・・育てられていた」と赤松啓介が片付ける背後には、このような事情もあった。

農業

K （結婚してからは）農業。よそげんしっかせい、もろっくいやった。＜農業。よその人の家に加勢に行って、（お金を）もらうこともあった。＞

K （家で作ったのは）米、芋、粟、はだか麦・・・大麦、小麦、はだか麦って。

K わげえ（で食べた）・・・米どんなほら、あまり、喰わせよらんやったでや。わけじゃ。上納すっど。米どんな、3月5月のいわいごんに、あげよったじや、わけじゃ、くわなんぞ。しょうがつぐれえじゃ。＜自分の家で。・・・米なんかは、ほら、あまり食べさせて貰えなかったよ。自分の家では。上納するんです。米は。あとは、3月とか5月の祝い事のときに。自分の家じゃ、食べることができなかったよ。正月ぐらいだった。＞

K ないな、よそかうってきちい、田をんすっどっがん、ここん下ん田うっをすっどかん、まっこち、うっどせんどんかん、せっがあがらどんって、言いよったでや。＜（旦那の親が）よそから来た人だったから、田（稲作）をしようにも、ここの下の田でやっていたんですけど、本当に、牛でも売らないと、田をしようにも、売り上げがあがらなくて出来ないんです。＞

K そって、うっの1匹売っちゃあ、そいの残りで、ふたせこう、みっせこうして。＜それで、牛を1匹売っては、その残りで、（田を）2畝買い、3畝買いして＞

K なんの仕事どんしよってん、ひとんしんかたん、男んしとおない。もっかたもやっばい、男んしにかわらんごと、しよったい。＜・・・どんな仕事をしていても、人に雇われてする仕事だから、男の人と同じように働いていたよ。持ち運びする仕事もやっぱり、男の人と同じように、やっていたよ。＞

K （農業でも）もう、同じような仕事やったい。

K 男んしのすっしごつも、おなごんしのすっしごつも、やっばひとつんしごつつ。＜男の人がする仕事も、女の人がする仕事も、やっぱり一つの仕事です。＞

*土地が無いので小作とさまざまな賃仕事をして生計を立てた。夫は結婚後も、農業と牛の飼育のほか、道路工事の土方の監督を続け、あちこちの現場に出かけていった。亀菊さんも土方に出ることもあった。そのかわり、牛を育てては売って、少しずつ田を購入していった。

*男女の仕事の違いはないと言う。牛を使う田すきは主に男の仕事だったが、後述のように亀菊さんはそれをした。

縫い物

K も、ほかどん、ないでちってましてどん、ないもできっでなあ。＜他のことも、何でもやっていたから、何でも出来るんです。＞

K いしよが破れい、ふせどしよったい、(姑は) そげなこともしがなrai・・・＜服が破れたらふせをするんだけど、それもしなかった・・・＞

K ほっで、ばばっがばあさんとたんを、ふせをしよっやっで。そっであたっが、なんじやしっがならんと思っただんなあ・・・＜だから私がばあさん(姑)の服の、ふせをしてあげました。それでも、私が、何もできないと思っただんなあ・・・＞

K こころみっ、やっただんや。＜試してみよう、ってことだったみたいよ。＞

K ほっでよ、男んしの、あわせと羽織となせって。ばっばな、ふせもせいようじやって。＜それでね、男物のあわせと羽織を縫え、と。自分はふせも出来ないくせに。＞

K こころみっなあ、きもん縫えって、持ってきごいやっただ、あわせも縫い上げっ、羽織も縫い上げっ、したと。で、ひがっ店ん、ほら今ふっとかん、店んいっち2階に上がってな。も、ひがっ店んたんもんしよっがやっで、8日ばっかい、縫うたい、きもんの作ったい・・・＜試しにね、着物を縫えって、持ってきて言うんですよ。だから、あわせも縫い上げて、羽織も縫い上げてみせたんです。そしたら今度は、東呉服店、今は大きくなった、あの店の2階に上がって。その東呉服店で反物の仕事があって、8日間ぐらい、縫い物をしたり、着物を作ったりして・・・＞

K きもんの縫うたっが無いときは、ものもらいにいったい、きもんのすんがもう、よーったいしよったと。＜着物を縫う仕事が無いときは、別の仕事をもらいに行ったり、着物が済めば次と、よくやりました。＞

K せがん、ふっとか家たてつまどがん、機械でせんやっじ、手ばっかどんがん。＜あの、大きな家を建てる前は、機械で縫うのではなく、手縫いばかりだった。＞

*姑の嫁いじめをみごとにはねかえした。嫁いじめは他にもあったが省略する。

*根占の街の真ん中にある東呉服店で縫い物をした。それほどの腕前をどこで身につけたのかと尋ねると、「なろよっか、慣れ」(習うよりも慣れろ)という話になった。

ご飯をもす

K もう、ひいてん、百年ばっかいどかん、あっが。ふっかげっがかいでなあ、あのふっ

とか家も出来たでなあ。ご飯をもす・・ご飯のもいかたも、もう一人で。ひろちゃんが結婚しいかたつも、250人分、ご飯を我がいで、熱くいれ、いれたんをばせえかしよへ運んで、もう一人で、みたつとんが。もう、田島どんのそいっとどんも。もう、良かことがあってん、つくいどんは、一人でしよったと。セイロどん、大きいセイロどんもつきてなあ、しよったと。くもう、少なくとも、百年ぐらいになるのかな、あの店（東呉服店）は。2ヶ月がかりで、あの大きな家も出来たからねえ。・・・ご飯を盛るのも、一人でやりましたよ。ひろちゃんの結婚式も、250人分、ご飯を自分の家でつくって、熱いまま入れて、入れた食べ物を祭りの場所に運んで、本当に一人でやっていたんですよ。あと、田島さんの家の葬式のときも。もう、良いことがあっても何でも、料理は、私一人でしていたんです。大きなセイロをもってきて、料理してたんです。＞

*岩倉キチ子さんによれば、昔はご飯をもす（守す）というのは一番責任ある仕事だった。だから一番信頼のある人に任すし、人が聞けば「ご飯のもっどしやんせ」（ご飯を炊く係をしてらしたのですか、すごいですね）と感心するような役割だったという。亀菊さんは集落内での葬式や祝い事、大きな家（おげんしゃどん）の祝い事などを全部仕切ってやってきた。

夫の女性関係

K （直吉との結婚は）2度やっが・・・あっちにおなごをつくい、こっちにおなごをつくい・・・

K もう、仕事げ行っちゃったんび、どこそこ・・・。女が柴をかつちよれば、そこ後追って、女が柴を刈ったとこいかたげて、ふたりですもといよったとく相撲を取った＝セックスをした＞。

B そいえばよお、じあんはよお、どっか山本のほうにも、よかおなごがおってよお、ばっばんが、そげんかたらせんやったけ？くそいえば、おじいちゃんは、どこか山本のほうにも、いい人がいたんでしょ、おばあちゃんが、そんなこと言ってなかった？＞

K 丸峯にな、シズって言ったとがいよ、・・・わげって、下ん子をば産んで、ふたっおってなあ、もうそけいったぎい、8日ばっか戻ってこんやったと。く（町内の集落の）丸峯に、シズと言う人だったか、・・・若くして下の子を産んで、ふたり子供がいたかな、（直吉が）もうその人のところにいってしまって、8日ぐらい戻ってこなかったのよ。＞

K 8日ばっか泊まっじ、戻ってこんじ、もそら、朝と晩なおなごげえで喰って、昼の弁当なそら、きよたかが行きよったろうが、しに弁当を持たせっやって、ほっておれが入れたんばまたもっていたい、また空弁当なもっきたい、昼のぶんなわいがしたい、朝晩なむこのしがしつかたい、8日ばっか戻ってこんやっただ。も、そんとかあ、あっして、佐多せえ戻らんじゃったろかいって、思うかたあ。まっこち、8日も戻ってこんどじ。＜8日間ぐらい泊まっていて、戻ってこなくて、もう、朝と晩はその女の家で食べて、昼の弁当はほら、きよたかが（同じ現場に）行っていたでしよ、彼に（夫のぶんの）弁当を持たせて、そうやって私がつくったのを持って行って、空になった弁当をまたこちらにやるのよ。昼のぶんは私がつくって、朝晩はむこうの人がつくって、8日ぐらい戻ってこなかった。もう、その時どうして私、佐多に戻ってしまわなかったのかって、思うのよ。本当に、8日も戻ってこなかったのに。＞

*亀菊さんがまだ籍を入れてもらっていない頃のことだった。このときになぜ実家に戻らなかったのかと悔やみ、「まっこち、この腐れ頭が」と繰り返す。

K もう、45年いっしょんおったが、タオルんひとつ、いつどももらわんじやった。＜45年いっしょにいたけど、タオルのひとつも、1度ももらったことないよ。＞

K ああ、自分でこうた。＜ああ、自分で買ったのよ。＞

K まいむねんしんにゃの、きもんをこっくりたい、反物をこっくりたい、しよったとやっで。＜愛人には、着物を買ってあげたり、着物を買ってあげたり、していたのよ＞

K ほっでいっどはなあ、もそんかたあ茶碗皿を買ったい、もらったりしよったどかん、そんなころからあ、いびれんかたん店があつたろうがな、わががうんっと、こげなちんけかたん、うすい茶碗な使いよったがな、まいむれんしにゃ、立派などんこうてやって・・・ ＜それで一度はね、ほら茶碗皿って買ったりもらったりするでしょう、そのころ、伊比礼さんのところに店があつたでしよ、私はとても小さくてみすぼらしい吸い物茶碗を使っていたのだけど、さっきの愛人には良いものを買ってあげて・・・＞

K ほってほら、みなのが言いよったろがい、どこそこんしがって、わっど良かたがって、ほったら、ノブけとんしやって、直吉がこっくりやいって。そんで、その晩なもう、山いもん掘ってなあ。＜それでほら、みんなが言うでしよ、どこの人だろうって、そんな良いものを買っているけどって、そしたら、ノブさんとこの人だって、直吉が買ってあげていたって。そんで、その晩はもう、山芋を掘ってね＝ケンカをしてね。＞

K ほっでや、おめんとこんしがこっくれっやって、ノブが言いよっでや、ほんでおいが、

こんだあ店んな行って、ないなこうてやったなって。おいもほら、ついもんじなあ。ほっていびれの店に行って聞いてなあ、せやったら、これやったどって、いびれん店のおいさんが言うやっが。＜それでね、あなたの家の人が買ってくれたって、ノブが言うから、それで私が、今度は店に行って、どれを買って行ったのかって聞いたのよ。私もほら、気が強いからね。それで伊比礼さんの店に行って聞いてみたら、そうしたら、これだよって、伊比礼の店のおじさんが言うのよ。＞

B ばっばん、じあんの彼女の、ノブさんな、どげな人やったな？きれなしかな？

K そげな、きれもなかった。＜そんなんに、きれいでもなかったよ。＞

A ああ、やっぱ怒ってる。

K まさこげん上ん、こまか家をつくって、おったとやっが。＜まさこの家の上のあたりに、小さな家を構えていたよ。＞

B ばっばん、ノブさんな、独身やったと、未亡人やったと？

K 未亡人で人ん子を産んじよって、こんころあ、じあんな、はたっどんこっくりたい、ズボンのこっくりたい・・・＜未亡人で人の子供を産んでいたよ。そのころは、おじいちゃんは、畑を買ってあげたり、ズボンを買ってあげたり・・・＞

K ほいで聞いてきよったとっが、ほいよったとやい。＜そうやって（どこかで）聞いてくるたびに、けんかしていたよ。＞

K まっこち、45年いっしょにおったっが、おいなタオルのひとつごちい、こっもらってねどって。＜まったく、45年いっしょにいたのに、私はタオルのひとつも買ってもらっていないって。＞

*相手は後家。後家になった後も複数の男性と関係をもって、子供を産んだりしている。後家についての赤松や宮本の記録と一致する。「自分の子を産んだわけでもないのにいろいろ買ってやる」直吉さんの人の好さに呆れると亀菊さんは言うが、やさしい人だったからなあ、と岩倉さんは述懐する。

実家に戻る

B ほってよお、佐多どん荷物もってよお、ひん戻ったことがあっとじゃなかったけ？＜佐多まで荷物もって、帰ってしまったこともあるんでしょ？＞

K ああ、ひん戻ったい。＜ああ、帰ったよ。＞

K 12月25日になあ、親どんの墓石たてをすっが、くっがならんじ、あくる日いったっが

なあ、ほって一晩泊まって27日にもどってきたん、ほったい、餅つっどしよったが、もっどおわったじおとったたら、サバン弱ったとんじ、こんでカマボコをしいて言いよっやが。わいがおらんまに、こうたっやが。サバなんだまるまらんじ、弱っとなどなあ、どしたっちでけんて、サバなんじゃじ、弱っとなんじ、カマボコはできんて、おいが言ったとや。ほったら、ばけんなかん水ぜんぶ、びんたかい、おいにひっかけてや。＜12月25日に、私の親が墓石を建てるので来てくれといったけど、行けなくて、次の日について、1晩泊まって27日に戻ってきたんです。それで（戻ってすぐ）餅つきを手伝って、餅つきが終わってほっとしていると、サバの弱ったものを（差し出して）、これでカマボコを作れというんです。私がいけない間に、買ったんでしょね。でもサバなんてまともらないし、しかも腐っているので、どうしても作れないって言ったんです。サバで、ましてや腐っていて、これじゃカマボコはできないって、私が言ったんです。そしたら、バケツの中の水をぜんぶ、頭から、私にひっかけてたんです。＞

K 直吉が。親がこっくるが、いいごとと言うで、そって12月27日というさみとんに、水がひっかけてろやが。もう、こげなとこい、おいがないか・・・直吉が。「親が買ったものに文句をいうな！」と。それで、12月27日という寒いときに、水をひっかけてたんです。もう、こんなところ、いてたまるかって思って・・・・・＞

K ほって、風呂敷もって、さみ頃やったがなあ、着物ん2、3枚もって、ももん頃あ、車もおらんたっでや、歩んで、歩んで、ほって佐多へ、もうあげなとしこかえっしないって。＜それで、風呂敷に、寒いころだったけど、着物を2、3枚だけ入れて、その当時は車もないから、歩いて、歩いて、それで佐多まで帰って、もうあんところに戻らないぞと。＞

K もう、びんたかい、ひっかけやがったじや。＜もう、頭から、ひっかけやがったからね。＞

K （佐多までは）5里どんかなあ・・・歩んで風呂敷持って。

K ほったら、かかあどんげが、患いをしよったげな、病をな、ほってな、ツルもハルも子どんなおってからんじやろが、戻らんじゃらい、もう、うって入れ替え差し替え、なこどしたしも来きたい、下んたけきちんおじさんも来たい、も、何度か連れかいやんとしたけど、戻らんで言うたと。＜そしたら、姑が、（病気を）患ったと。病を、それで、子供のツルもハルも（嫁に）行ってしまっていてなくて、（お前が）戻ってこいと、入れ替わり立ち替わり、仲人をした人が来て、下のたけきちのおじさんも来て、連れて帰ろうとするのだけど、（私は）戻らないって言ったんです。＞

K えー、何日ぐらいおったとかいなあ・・・・・

K （戻ったのは）えー、3月やったとかいなあ。もう、佐多ぜい行ったかい、戻らないしが、おなごんしが、50銭がけん、もやいが、はじまちよったでなあ。も、晩にゃあ、友達げえ、わらんこな、わらんこなあ打って、わらを人数分うってなあ、友達んげ泊まって、縄が2と8銭したやつじゃ、めいばん、友達んかたん泊まってなあ、縄をうかつたん。こげなとも始めちよったで、戻らんって。 <（戻ったのは）3月ぐらいだったかなあ。もう佐多まで行ったし、戻る気はなかった。女のひとが、50銭がけの、もやいを、始めていたんですよ。夜には、友達の家を集まって、わらを、わらを打って、わらを人数分打って、友達の家泊まって、縄が28銭だったのですよ、毎日、友達の家泊まって、縄をつくっていた。そんなことも始めていたので、もう戻らない、と言っていたんです。>

戦争の頃

K 男んしがみんな兵隊いってしもおらんかったろうが、おなごんしがなあ、たすつのコンクールにいかっならんて、くわあかさげい、お弁当なかさげい、広いたんばで、おなごんしが田すっどしいせいやったん。<男の人はみんな兵隊に行っていなかったでしょう、だから女の人が、田すきのコンクールに行かなくてはいけなくて、くわを持って、お弁当を持って、広い田んばで、女の人が田すきをしないでならなかったのですよ。>

K おなごんしが、1番やった。<女なのに1番だった。>

*戦争中は男がいないので、ふだんは男のする田すきの仕事を女性や老人たちがするコンクールをして、銃後の農家の志気を鼓舞した。田すきは牛を使う。亀菊さんは実家で牛を使うのに慣れていたので、女性なのに1番になった。

K そいでなあ、ぶらっの婦人会がまいあっ、旗をかかげっなあ、ばばあもまいあっ旗をかかげっなあ、まいとったで。婦人会の旗かかげっなあ、まいあっまいとったで。「今日はどこ部落のしが行く」でえ、見送りでえ、「どこ部落が行って」し見送りでなあ・・・<それですすね、部落の婦人会が毎朝、旗をかかげてですすね、私も毎朝旗をかかげて、行っていたのですよ。婦人会の旗を持って、毎日行っていたのですよ。「今日はどこ部落の人が行く」からということで、見送りに行って、「どこ部落が行くぞ」と言っっては、見送りでなあ・・・>

K 水害といっしょんといやっでや、昭和12、3年・・・上ん山がくずえってきせい、水害がきてい、そのとつもなあ、婦人会でなあ、きもんのきがっどんもったってなあ、男んし、おなごんし、ってばばんとこもってきやっじ、みんなとこが何人かってきやっじ、きもつがきたしもなあ、男んし、おなごんし、ってわけなあ・・・ <水害があったときと同じぐらいの時期だったです、昭和12、3年・・・上の山が崩れて、水害がきて、そのときも、婦人会で、着物の着替えを持っていったり、男の人や女の人が私のところにきたので、みんなのところには何人いるのかと聞いたり、着物を届けたひとにも、これが男の人、これが女の人、と分けてやって・・・>

*亀菊さんが婦人会の副会長をしていた頃、水害があつて、救援物資の分配の差配などをして大変だった。戦争中は毎朝出征兵士の見送りをした。「難儀をしたとなあ」という文脈で繰り返し語られる話。

妾になった後家

B ほつてよう、そこん上んとこんよお、家をつくろいやった、なんとかさんておつてよお、Pさん、女んしおいやったな？どこんしやったけ？<そしてね、そこの上のところにね、家を造った、なんとかさんって人がいたよね、Pさん、女の人がいたよね？ この人だったっけ？>

K 佐多んコオリじゃ。そつてそこんしの旦那んしが早う死んで、来ちよつて、未亡人なつちよつて、ほつてPんしんとこにきちよつたやっぞ。おまっばや。 <佐多のコオリという所の人です。そしてその人の旦那さんが早く死んで、(こっちに)来て、(その時)未亡人になっていて、それでPさんのところに来ていたんです。オマツバとかいっていたかな。>

B ほつて、こめんけ家をつくいやんど？<そして、小さい家をつくつてやったんだよね？>

K もひといな、もひとい、Pどんのあと、ふもとんとこい旦那(Q)が、きとつたでや。<もう一人ね、もう一人は、Pさんの他に、麓のところに住む旦那(Q)が、来ていたみたいだよ。>

K きよつたつとやっが、こつき来て3日目にけ死んで、そのあとをPどんが、とらなつたわけ。<来ていたんだけど、ここへ来て3日目に死んで、そのあとをPさんが、頂くことになつたわけ。>

K ああ、いっばんめん旦那にゃ、3日でけ死んだ。長いこと行ったり来たいしよったどがな、こけきて3日でけ死んだ。＜ああ、一番目の旦那は、3日で死んだよ。長いこと往き来はあったみたいだけど、ここに来て3日で死んだ。＞

K かけきよったやが、帰って3日してもおいでやらんが、てことやっが。＜通ってきていたんだけど、帰って3日しても来なくて、ってことでしょ。＞

K 明日あおかいて、かたいうごて、車庫んとこんふたりおうて、おねいっさ行って、坂茶屋んへんで、ご馳走どん喰って、良か芝居どんして・・・＜明日会おうって、話し合って、車庫のところでふたりであって、大根占まで行って、坂茶屋などで、ご馳走をたべるなど、男女の交際をして・・・＞

K ひっばっかいよ、Pどんも歳とってかい、晩なあそんなんわ。＜昼だけよ、Pさんも歳とってからは、夜まで遊べないし。＞

K （家は）銀杏の木があるところやでや。銀杏に隠れてい、見よったでや。石垣ん上んとこん・・・Pんが来るんやんだ、みうったっじ。＜銀杏の木があるところだったから。銀杏の木に隠れて、見ていたから。石垣の上のところの・・・Pさんが来るところが、みえていたよ。＞

K も、前ん日きて、ここで語りよっげな、明日何時にすって。＜もう、前日にきて、ここで話合っていたからね、明日何時にするかって。＞

K ほって車庫んとこで別れるときも、晩のおかずのおてっけもろきいやったど。

K もう独りになってからやい、Qんだんも、何歳やっただげなあ・・・おっさんのけ死んでから、2、3年してかいやっただい。おなっばどい、けいかけやっただもんねえ。＜もう独りになってからだから、Qのだんも、何歳だっただろうね・・・旦那さんを亡くしてから、2、3年してからだっただけねえ。女の人のほうから、押しかけていったもんねえ。＞

K R（Qの妻）がけ死んでから、まれけん女房な思いださせんなつ、いいやっただけたい。＜そう、Rさんが死んでから、たまには女房を思いだしませんか、と言って（オマツバが）言い寄ったわけよ。＞

K あたいで良ければ、って、いいやっただけよ。

K （オマツバは）うん、うん、ハイカラどんじゃった。どこそん、クリームじゃったか・・・＜うん、うん、ハイカラさんやっただ。どこのクリームだったか・・・＞

K クリンシンクリームをば、つけちょっとやっが。おいどんな、つけっこともねえたっが・・・＜クリンシンクリームを、つけていたよ。私なんかは、つけたこともないんだけど・・・＞

K ああ。良かかざがしよったでや。＜ああ。いいにおいがしていたよ。＞

K あっつ（オマツバは）、（昼間は）ごろねいや、何のすうてねっし。も、反物どん、とらえにいっぱっかい。＜あの人は、ごろ寝していて大丈夫でしょ、何しなきゃいけないわけでもないし。服を買いにいくぐらいじゃないの。＞

K オマツバは佐多や、佐多んコオリや。＜マツさんは佐多の人、佐多のコオリの人。＞

K いまおなごん、けっそせんかたあ、アゲンソンのしとコオリとかっくるっが。小太郎次つつう人とひっぱちよらっじ。＜その女の人は、結婚するまえは、上園の人と（付き合っていて）コオリから通っていたよ。小太郎次とかいう人と付き合っていた。＞

K そいで小太郎次が病なしおって、病院におっとかあ、そそこんげのおばさんと、よかごとなったと。そいで、マツなうすられ・・・＜それで小太郎次が病気をし、病院にいたとき、看病していた女と仲良くなってしまうんです。それでマツさんは捨てられて・・・＞

O オマツバみたいな生き方を、どう思いますか。

K いけな思うも何も・・・あげな暮っしやしたねえ。

K 人んいけんこげん言わる暮らしなよか。人んいけんこげん言われるこっちゃんね。＜人にいろいろ言われる暮らしは嫌だ。人にあれこれ言われるのはごめんだ。＞

*また後家の事例。後家について「小ざれいなのは旦那衆の妾になっているのが多かった」という「土佐源氏」の語りの通りの生き方をしている（宮本 1960=2004：143）。亀菊さんはそういう生き方を厳しい目で見ている。

*麓（ふもと）とは島津氏が在地支配のため領内各地に設けた外城（とじょう）の麓集落のことで、半士半農の武士である郷士が集住して、地方の役人として農民を支配した（中村 2000：79-89）

既婚女性の男性関係

O おかたが、他の男の人とつきあうことはありました？

K むかしは、そげんことは、多かったど。よその見知らぬ男の人とかなあ。今んしは、そげなこと無いけどなあ。

O おかたが他の男の人となったら、旦那は怒りますよね、そしたら別れるんですか？

K ま、そげな人もおっと。

O どちらから誘うんだろう？

K やっぱ男かなあ。

O おかたになっても、もてる人もいましたよね？そういう人は、いくつぐらいまでもてるんですか？

K いくつかなあ。どうしても、若いほうがいいでなあ、30ぐらいだろなあ。

O 男は？

K 男はなあ、我が孫になるくらいの子と、孫ん子のようなと一緒になったりもすんなあ。そんなしもおるなあ。孫んしくらいの女となあ。すもとく<セックス>しよったとなあ。

O 男が捨てられるということもありますか？

K それもあるなあ。言葉がおうて一緒になるとなあ。男を好きになって、まえの男を捨ててなあ、その新しい男と一緒になると。昔はそういうのがようあったと。

O 直吉さんと結婚したあとも、他の男が言い寄ってきたでしょう？

K ええ、おなじ部落のおじさんが。畑を渡る、近道があったでや。そんおじさんな、竹細工をしよったでや。私が通れば、ほら、おじさんが、あたしをおかたにしたかったって、言いよったでや。

別れ

O 別れて他の人と一緒になるのは恥ずかしいことと言われたりしませんでした？

K んにゃあ。好きな人と暮らすったら、もう、恥ずかしいこともなかとよ。嬉しいと。もとのおかたをうっじ<捨てて>、別の女と暮らすしが、多かったと。そげなしが。

K 別の、好いた女とまた別に、家を借りるなどして住むわけ。

K 同じ部落でも、そげなことがあると。

*離婚して好きな人と暮らすのは恥ずかしいどころか「嬉しい」ことだという、規範意識に縛られない素直な表現。

K (おかたは) そういうときは、戻らなしようがなかで、ほら。実家に戻って、お父さんには言いがならんが、お母さんに、こげこげなったじ、家に戻ってきたでって、言うと。やっぱ、語らんな、男と一緒にやったとになして帰ってきたとかいって、お母さんな、思うじ。お父さんには語りにくいじ、やっぱ、お母さんには話すの。女がお母さんに、相談するわけよ。また一緒に暮らしてくださいって。

K 捨てられた女にゃ、そら、思うことが一杯あるのよ。あのおなごがおったばかりに、自分が捨てられたって。残念やっでや。

*胸のあたりを手でかき回すような仕草をして、他の女に男を奪われる無念さを語った。

恋についての歌

K おじさん達の、まだ20歳にならん、学校あがりの15、6の頃、語って聞かせよったことどん、語ってみれば良かったって、思いでっせえな。<おじさん達が（私に）、まだ20歳にならない学校あがりの15、6の頃、語って聞かせてくれたことなど、話してみれば良かったとも思ったんだけどね。>

K 着物にたとえてな、はおりの着物にたとえてな、「わしとお前さんな、あわせのはおり」って。上の柄が男になってな、裏はちった短くて。裏と表が、男と女になるわけ。裏の短いほうが女、男がこん裏の表になるわけ。それで、紐で結ぶやろうが。それで「わしとお前さんな、あわせのはおり」って。

K 男と女のたとえよ。それで、「川の字の、なかみを川に流して、せめて二人で寝てみたい」て。川の字は、三つあろうが、そのなかを流して、そしたら二人になっどが。それで、「せめて二人で寝てみたい」って。

K 赤ちゃんじゃっか、他人じゃっか。その中の字を流して、両方の長いのが二人で、それでおう、おうごとあっ、って。「せめて二人で寝てみたい」って。フッフ、先生、こげなとな。ほって、今度は焚き物にたとえてな、焚くとかあ、ほら、両方にちった大きな薪をやっどが、薪をいろいろのなかくべて、中に小枝を入れろうが。小枝はくべて燃えるどが、大きい薪は残るどが。ほって、大きい薪を冷やして、今度また火をつけるとっか、いったん燃えた薪やっで、すぐ火がつくやろうが。ほいでそら、「わしとお前さんな、焚きもんの薪よ」って。1度語って火がついたおなごとは、2度目は語りが早いって、すぐ火がつくって。

*11月の最後の訪問の日に、前日の晩に語り残したことを思い出したと言って、一連の恋の歌について語ってくれた。

K （婚外子は）いいやあ、いじめられはせんよ。

K 歌があるでなあ。「野でも山でも、子は産んでおっじゃれ」って。「なんの宝よっか、

子が宝」って、歌があると。

K 好いた男と女ならな、野でも山でも、よその男とやっても、よその女とやっても、子供は産んどけて。「金よっか親が宝」って、そげな歌もある。

K 歌は何でもなあ、恋が混じっちゃってやなあ。「恋の混じらぬ歌はない」って、私も言うでやな。

K あとな、わしとお前さんが添われんときは、電車のレールを枕にして、死んでしまっても悔いはないとかなあ。「わしとお前さんが添われんときは、レール枕に汽車を待つ」ってな。死んでしまっても、悔いはないってな。

K （親の反対は）強かったと。丁寧に育てたのを、なかうどく仲人>に頼んだりしてなあ。人の大事な子供をもらうけなあ。

K まこち、いろいろ昔のいろいろなたえ話があつてや。着物のたとえや、火の焚くもんやな。ものごとの二人で、口げんかしてん、つかんかかってしてもなあ、手を出しても、いさかいやけどな、一晩あかせば、胸もさがって<気分が落ち着いて>、けんかもせんなあ。けんかしたらもう、語りがならんでや。ほんと、よか風につくってあるじなあ、先生。着物もなあ、抱き合わせなあ、男が女を「抱く」んなあ。先生にこんな話をすつとやったって、帰ってから思ったわけ。

5. 考察

亀菊さんの100年にわたるライフヒストリーを、ほんの限られたエピソードについてではあるが、足早に追体験してきた。最後に本稿の出発点に戻って、亀菊さんのライフヒストリーから、最初に立てた問いにどのような答えを与えることができるのかを考えてみよう。

本稿は歴史人口学的に見た近世九州海村の特異性という問題から出発した。著しい人口増加、世帯規模の大きさと合同家族世帯を多く含む世帯構造の複雑さ、高い出生率と頻繁な婚前・婚外出生、頻繁な個人の世帯間移動などである。

この3番目の点については多くの先行研究があるが、実態の理解は必ずしも一致しない。おもに未婚男女が繰り広げる婚姻を前提とした配偶者選択のプロセスであったのか、未既婚の別や老若を問わず自由楽しんだ「遊び」であったのか、という違いである。婚前に生まれた子はほとんど後の夫の子なのか、別の男性の子である場合も多いのか、という問いとも関係する。また、こうした関係は女性も享受する恋愛であったのか、男性による一方的な女性の支配だったのか、という論点もある。さらに歴史的変化の方向をめぐって、

秩序ある交際から放縦へと向かったのか、自由が失われたのかという枠組みの対立がある。

亀菊さん自身の経験と、周囲の見聞を総合すると、まず、婚姻を前提としたわけではない男女関係は頻繁に存在した。亀菊さん自身も既婚男性との間に婚外子を産んでおり、姑も妊娠した子の父親とは違う男性と結婚した。ヨバナシから妊娠しても親の反対で結婚できないこともある。後家が既婚男性の浮気相手になったり旦那衆の妾になったりすることが多かったのは、民俗学の報告そのままである。既婚女性の婚外関係も多かった。

ではそれは女性たちにとってどういう経験だったのだろうか。赤松の描くようにおおらかに楽しめることばかりではなかったのは確かである。この聞き書きの中でもっとも悲惨なのは、連れ子を夫に虐待された姑の事例だろう。「嬢が産んだ子どもの卸元」を問題にする「料簡の狭い男」はたぶんあちこちに存在した。また土方仕事をしても山仕事をしても、女性たちにとって仕事の場合はセクハラと強姦の危険に充ち満ちており、女性の選択権が無いわけではもちろんないが、それはときおり力ずくで行使しなければならなかった。

男性の性の自由は、裏切られる女にとっては何十年たっても消えない傷を残した。「そら、思うことが一杯あるのよ」「あのおなごがおったばかりに」「残念やっでや」という言葉には万感がこもっている。あのお伽話のような宮本常一の「土佐源氏」の女性たちにも「思うことが一杯」あったろうが、描かれてこなかった。

しかし、だからと言って、女性たちがただ苦しんできたかと言えば、それは違う。生活のために自から押しかけて妾になった後家もいれば、男を捨てる女もいる。また、「日の三日でん、暮らすごた」と言われて、おかたのいる人とは知りながら家を出たとき、恋心を抱いていなかったとは到底言えまい。「恋の混じらぬ歌はない」と言うように、恋はこの地域の人々にとって男女を問わず重大な関心事であった。前の人と別れても、人を傷つけても、「好きな人と暮らすったら」「嬉しいと」。いろいろあっても「一晩あかせば、胸もさがって」「ほんと、よか風につくってあるじなあ」。この地域の人々はそうしたことに正直である。

恋のツケは子どもというかたちで回ってくる。連れ子を虐待された姑の例のように、また、親元に残してきた息子が不憫でならない亀菊さん自身のように、「生まれた子供はいつの間にかムラのどこかで・・・育てられていた」というような簡単なものではない。しかし今日と比較すれば、そうした子供が居場所を得やすい社会であったのも事実である。「野でも山でも、子は生んでおっじゃれ」とは、そうした受け皿があるからこそ言えることであった。姑の連れ子も、亀菊さんの息子も、親の手を離れても立派に育った。

ここで、婚外出生以外の歴史人口学的知見が説明される。婚外子であろうと間引きなど

せず「子は宝」と育てる社会であったからこそ、人口は増加した。そうした子どもたちや、離婚したあるいは婚外子を生んだ子連れ女性たちが親元や親類の家に身を寄せた移動が、頻繁な個人の世帯間移動であろう。複雑な世帯構造はその結果と言える。合同家族世帯も、中国のような規範というより、東南アジア研究者の言う「家族圏」に近い、状況依存的に伸び縮みする世帯の姿であろう。婚外子差別は無いというのが、実際、亀菊さんの息子は実家の跡取りとなり、亀菊さんの初婚の家では出戻った娘の子を跡取りにしたようだ。

では、歴史的変化については、何か分かるだろうか。このインタビューで「昔は・・・」「今は・・・」という言い方がされるのは、「(女が)男を好きになって、まえの男を捨ててなあ、その新しい男と一緒になると。昔はそういうのがようあったと。」「むかしは、そげんこと(おかたが婚外関係をもつこと)は、多かったど。よその見知らぬ男の人とかなあ。今んしは、そげんこと無いけどなあ。」と、今のほうが自由が失われた、という文脈だった。しかもいずれも女性の性的自由が減退したという内容であるのが興味深い。

自由が減退して親の決める結婚と買春が多くなったのかということ、そういう証言は必ずしも得られていない。亀菊さんの最初の結婚はヤウチ内での結婚であり、婚家は田を所有していて財産の保全に熱心だった。森栗の言うようにヤウチ婚がヨバイより好まれるようになった時期に当たっているのかもしれないが、前者が新しい形態なのか、「男の無秩序な暴力」がこの時期に強まったのかどうかは、この聞き書きからだけではわからない。ただ、ヤウチ婚だからといってうまくいくとは限らなかったのは確かなようだ。

ここまで亀菊さん自身の経験と周囲の見聞から、かなり自由な男女関係を描いてきた。しかしそれは当時のこの地域の人々みなに共通する経験を代表しているのかというと少々留意すべき点がある。まず亀菊さん自身の立場としては、初婚が離婚に終わっている。「出戻り女」や「後家」は性的なターゲットになりやすい。初婚では親の決めた裕福な家に嫁ぎ盛大な結婚式もしたが、その結婚が続いていれば、大きな農家の嫁としてももう少し別の人生が待っていたかもしれない。

また、夫や夫の父親、婚外で生んだ息子の父親など、登場する男性には共通性がある。職業は土方、山仕事、大工であり、いずれも漂泊性が高い。「わしらみたいに女をかまうもんは大方百姓しておらん人間じゃ。みんなにドラと言われた人間じゃ。」という土佐源氏の観察が事実だとすれば、男性の側の条件からも、本稿のインタビューは地域の性的自由を過大に描いている可能性を否定できない。とはいえ、一部の男女のみの経験というより、連続したものではあったろうが。

本稿では、徳川時代の歴史史料の解釈のために、現在得られるオーラルライフヒストリーが有効かどうか検討するという、無謀とも思える試みに挑戦した。その試みの成否につ

いては読者の判断に委ねるほかないが、オーラルヒストリーに登場した人々の行動は、歴史人口学的分析結果と予想以上につじつまの合うものだったというのがわたしの印象である。その解釈をめぐるいくつかの論点については、すでに決着がついたのではなかろうか。

畠中亀菊さんのライフヒストリーは、本稿に収録したかぎりでも、ここでの検討をはるかに超える豊かな内容を含んでいる。その豊かさを十全に活かした分析を別の機会に試みたい。

謝辞

通算3日間にわたり飽くことなく語ってくださった畠中亀菊さんと、ご自宅を提供して温かい雰囲気の中でのインタビューを可能にくださった岩倉次男さん・キチ子さんご夫妻に心よりの感謝を捧げます。また、有菌真代さんにはテープおこしだけでなく標準語訳も引き受けてくださったことへのお礼を申します。なお、この研究は文部科学省科学研究費基盤B(1)「アジア家族の変容と伝統の創造に関する比較研究」(研究代表者橋本泰子四国学院大学社会学部助教授)および同基盤B(1)「前工業化期日本の家族とライフコースの社会学的研究」(研究代表者落合恵美子)の成果の一部です。

文献

- 赤松啓介 1986『非常民の民俗文化』 明石書店
 江守五夫 1974「伝統的な婚姻制度」『日本民俗文化大系8 村と村人』 小学館
 Goody, Jack, 1976, *Production and Reproduction*, Cambridge University Press.
 平井晶子 2003「近世東北農村における『家』の確立」『ソシオロジ』第47巻3号
 Kurosu, Satomi, Noriko O. Tsuya and Kiyoshi Hamano, 1999, "Regional differences in the patterns of first marriage in the latter half of Tokugawa Japan," *Keio Economic Studies*, XXXVI-1: 13-38.
 Loux, Francoise, 1978, *Le jeune enfant et son corps dans la médecine traditionnelle*, Flammarion. 福井 憲彦訳 1983『＜母と子＞の民俗史』 新評論
 三砂ちづる 2004『オニババ化する女たち』 光文社
 宮本常一 1960=2004『忘れられた日本人』 岩波文庫
 森栗茂一 1995『夜這いと近代売春』 明石書店
 内藤莞爾 1973『未子相続の研究』 弘文社
 中村明蔵 2000『薩摩民衆支配の構造』 南方新社
 落合恵美子 1997「失われた家族を求めて——徳川社会の歴史人口学」河合隼雄・大庭みな子編『現代日本文化論2 家族と性』 岩波書店 (2000『近代家族の曲がり角』 角川書店 に収録)
 Ochiai, Emiko, 1998, "Two types of Stem Household System in Japan: the *Ie* in Global Perspective" in Emiko Ochiai and Antoinette Fauve-Chamoux eds., *House and the Stem Family in EurAsian Perspective*, the Proceedings of the C18 Session of the Twelfth International Economic History Congress held in Madrid.
 落合恵美子 2004a「歴史的に見た日本の結婚」『家族社会学研究』15-2: 39-51.
 落合恵美子 2004b「歴史人口学から見た家・村・ライフコース」日本村落社会研究学会編『村落社会研究』

39: 49-96、農山漁村文化協会

落合恵美子 2004c「オーラルヒストリー」『AERA MOOK 新版社会学がわかる』朝日新聞社

Ochiai, Emiko, 2005 (forthcoming), "The *ie* in global perspective," Jennifer Robertson ed., *A Companion to the Anthropology of Japan*, Blackwell.

Ochiai, Emiko and Yoshihiko Ono, 2002 "Facing the East China Sea: Family and demography of a Japanese fishing village, Nomo, 1766-1871," presented at the annual meeting of the Social Science History Association, St.Louis.

岡本達明・松崎次夫編 1989-90『聞書水俣の民衆史』全5巻 草風館

大間知篤三 1938『『隠居』について』『年報社会学』5 (1975『大間知篤三著作集』第1巻 未来社に収録)

桜井厚 2002『インタビューの社会学』せりか書房

瀬川清子 1972『若者と娘をめぐる民俗』未来社

司法省編 1976『全国民事慣例類集』青史社

竹内利美 1991『竹内利美著作集3 ムラと年齢集団』名著出版会

津谷典子 2002『近世後期漁村における人口増加と出生力の分析』速水融編『近代移行期の人口と歴史』ミネルヴァ書房

(おちあい えみこ・教授)

The Life History of a One-hundred-year-old Woman: Love and Life in Seaside Villages in Kyushu

Emiko OCHIAI

This essay is an attempt to make use of an oral life history to understand the background of peculiar patterns of historical demography in seaside villages in Kyushu. These villages have unique characteristics from a demographic point of view. A large village size, rapid population growth, large and complex households with a considerable proportion of joint family households, high fertility, frequent births out of wedlock, and frequent movement of individuals between households are among them. In short, these areas have a custom of sexual freedom outside marriage and flexible organization of domestic groups different from the ordinary *ie* in other areas in Japan. Our key question is whether the sexual freedom was mostly restricted to the young unmarried people in the process of mate selection or was widespread among those married and unmarried. Another question is whether women also enjoyed sexual freedom or they just suffered from it.

The major part of this essay is a transcript of the oral life history of an old woman who was born in 1903 in Sata on the tip of the Osumi peninsula in Kagoshima prefecture and lived in Nejime, the neighboring village. She married twice and gave birth to a baby out of wedlock between two marriages. She also spoke of the custom of *yobanashi* (or *yobai*, free sex), sexual harassments, extramarital love affairs of her second husband, and the story of a widow who became the concubine of two wealthy men.

We conclude that the people of this area, both men and women, enjoyed and sometimes suffered from love and sexual freedom not necessarily restricted to those unmarried. Children outside wedlock sometimes became victims of domestic violence but many of them found their niches in other households.